

クリスチャン医師と考える
LGBT問題

レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー

はじめに

人間は一人では生まれてくる事はできません。

家族による命の繋がりがなければ、この世界に生まれる事はできませんでした。あなたは、1400兆分の1の確率でこの世に生まれてきました。“あなた”とは、奇跡的な確率で誕生してきた何にも代える事のできない尊い存在なのです。

そのようにして、せっかく与えられた命、授かった命を私たち人間はどのように使い、また扱っているのでしょうか？

今の世の中は、できちゃった婚や授かり婚、また事実婚が当たり前となり、生まれてきた子供の命に対しての責任や、守り育てるという意識がないまま、父親、母親になってしまう人がいます。女性の中には、望まない妊娠のために中絶を選択し、大きな傷を抱えている人もいます。家族という単位が疎かにされ、‘親’という務めに無責任な夫婦が離婚や再婚をする事で、再婚相手や離婚後の内縁関係者が子供に虐待し、死に至らしめた悲惨な事件も耳にします。親の感情（情欲）のままに振り回され、子供たちも心身共に傷ついています。

近年では、生殖補助技術（精子提供・卵子提供、代理出産）を利用して子供をもつ独身者やLGBT（性的少数者）によって多様化する家族が増え始めています。社会は、それを新しい家族の形とって紹介し、理解を求める方向に進んで

いますが、本当にそれで良いのでしょうか。

両親が、しっかりと親としての役割を果たし、その家庭が、安全で平安な環境である事、心身共に健全に成長していく事のできる幼少期・少年期が約束されている事が、未来を担う子供たちに与えられるべき権利だと思います。

命の尊厳と家族のあり方が非常に軽んじられている時代にあって、青少年には、ますます安易な性交渉による性感染症が蔓延し、また、いつの間にかLGBTの人たちが、自身の人権を強く主張し、結婚し子供ももつ事を願うようになり、社会もそれを容認する動きが加速して…このままで良いのでしょうか？ここから人類はどうなっていくのか！私たちはどこに向かうのか！未来への恐れはありませんか！？

聖書は、宗教書ではなく、全ての人間に平等に与えられた書物です。私たち一人一人に、命を授けて下さった神様からのラブレターである聖書には、その命をどのように考え、使い、扱っていくべきかが書かれています。また、どう解決していけば良いのか分からない個人的な問題や社会問題に対する解決方法も書かれています。

聖書と照らし合わせた時、今を生きる私たち人間の在り方は、非常に危険です。

この冊子では、聖書を土台に、クリスチャンである産婦人科医（生殖医療専門医）の観点からも、私たち人間一人一人がここに存在している事の命の重みと命の繋がりについて考えていきたいと思います。

第1章 青少年に向けて

聖書には「命」という言葉がたくさん出てきます。聖書は「命」について教えてくれます。「命」とは何か、与えられた「命」の使い方、すなわち人間の生き方を導く書物です。

その「命」を繋ぐ事について、私たちが造られた神はどのように教え、定めているのでしょうか。

神の言であるみことばには、次のように書かれています。

創世記1章27節～28節

【神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。神は彼らを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ。】

創世記2章18節

【また主なる神は言われた、「人がひとりであるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう。】

創世記2章22節～24節

【主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた。そのとき、人は言った。「これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。男から取ったものだから、これを女と名づけよう」。それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。】

神は、一人の男性（アダム）のあばら骨から一人の女性（エバ）を造られました。男性が女性をしえたげて踏みつけるために足から取ったのでも、女性が男性を尻に敷くために頭から取ったのでもありませんでした。助け手として仲良く並んで歩くようにと脇のあばら骨から、そして妻を大切に愛して養うようにと、心臓に近い左側から取られました。男性の骨から男性を造ったのでもなく、一人の男性のあばら骨から複数の女性を造ったのでもありません。そして“あばら骨をあげた男性”と“あばら骨をもらった女性”が出会った時、その二人が一体となるように決めました。それが、結婚です。神は、この結婚をととても重んじておられます。なぜなら、結婚によって結ばれた一組の男女から、次世代を担う子供が誕生する、すなわち「命」が繋がっていくからです。

聖書は、神が定めた夫婦から尊い命が誕生するという神の秩序を教えています。命を授かる事の感動と、命を育む事の喜びは、私たちにとって何ものにも代えられない体験です。神が、人間に「生めよ、ふえよ、地に満ちよ…」と言われたように、神の定めた正しい男女の在り方、生命の秩序の中で「命」が繋がっていく事が、神が人間に与えた最高の祝福です。

マルコによる福音書 10 章 6 節～9 節

【しかし、天地創造の初めから、『神は人を男と女とに造られた。それゆえに、人はその父母を離れ、ふたりの者は一体となるべきである』。彼らはもはや、ふたりではなく一体

である。だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない。】

しかし、現代は、婚前交渉によるできちゃった婚や授かり婚が、当たり前となっています。そして、性的関係の乱れは、人間の体に、「命」に関わる深刻な事態を引き起こしています。それは「性感染症（STD）」です。

性感染症は、性交渉によって感染する病気です。多くは、不特定多数の相手との性交渉が、その要因となります。近年はそれに加え、初めて性交渉をする年齢が、低年齢化している事も、患者数の増加に拍車をかけています。

性感染症の中で、最も恐ろしいのが「エイズ（HIV: ヒト免疫不全ウイルス）」です。エイズは、男性同性愛者に多い事がよく知られていますが、もちろん男女間の性交渉によっても感染します。エイズは、HIV が免疫細胞を破壊し、免疫不全を起こす病気です。特効薬はなく、発症すれば免疫の低下により全身が衰弱し、命の危険に直結します。また、潜伏期間も HIV が体内で複製され続けるため、他者へも感染させてしまいます。

最近では、「子宮頸がん」も、性交渉によるウイルス（HPV: ヒトパピローマウイルス）感染が原因であるという事が分かってきました。子宮頸がんは、近年、低年齢化する性的関係の乱れによって、若い女性に急増している病気です。また、それに伴う死亡率も、急増している事が問題になっています。子宮頸がんになった人は、子宮を失い、妊娠する事ができなくなるばかりでなく、自分の命を失う結果にもなりえます。

ウイルス感染を予防し、子宮頸がんの発病を予防する目的で、ワクチンが登場しました。しかし、予防接種を受けた人たちに、様々な深刻な健康障害が現れたため、ワクチンによる危険な副反応ではないかと問題になっています。

「クラミジア感染症」は、性感染症の中で最も患者数の多い病気です。この病気の症状が進むと、卵管や子宮内膜に炎症を引き起こし、不妊症や子宮外妊娠の原因となる事があります。

つまり、性の乱れの代償である感染症は、自分の子供をもつ事ができなくなるだけでなく、自分の命と次世代の命、そして大切な人の命の滅びにつながる重大な問題である事が分かります。

聖書は、【すべての人は、結婚を重んずべきである。また寢床を汚してはならない。神は、不品行な者や姦淫をする者をさばかれる。】（ヘブル13：4）と教えています。これは、「自分を大切にし、与えられた命を大切に生きなさい。私は、男を女のために造り、女を男のために造り、その二人が、聖なる結婚生活の中で結ばれるように定めた」という、神から若い人たちに対する愛であり、乱れた性的関係による深刻な問題に陥って人生を狂わされ、命を失う事のないように、という警告でもあります。

前述したような問題になっている子宮頸がん予防のワクチンは、若年での婚前交渉がある事を前提に、接種されていたものですが、神が定めた正しい男女のあり方のもとでは、本来は必要のないものです。聖書が教えている「結婚の床

を重んずべきである」という事が指し示す真意を、私たちは、わきまえ知らなくてはなりません。一時の情欲によるたった一度の性交渉が、本来神が定めた夫婦になる為の結婚、夫婦として受けるべき祝福を、台無しにする事を覚えてください。聖書の倫理（神と人間の関係）を覚え守る事は、私たちを守るものです。その守りの中に入る事は、私たちの生命を守り、次世代の子供たちを守る事になります。

やがて父となり、母となる日が来ます。若い人たちは、未婚のこの時から、このような命に関わる聖書倫理を学び、深く考えてみる事が、自分を大切にする事になります。聖書は「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい」とも教えています。自分や、自分の命に連なる新たな命、周りの人の命を大切にし、神の定める命の学びに培われ、養われながら大人になっていく事が、私たちに命を与えてくださった神が喜んでくださる命の使い方ではないでしょうか。

伝道の書12章1節～2節（リビングバイブルより）

【若さに酔って、あなたの造り主である神様を忘れてはいけません。生きていることを楽しむ余裕などない逆境の時がくる前に、若い日に神様を信じなさい。年をとり、陽の光や月、星がかすんでよく見えず、夢も希望もなくなってから、神様を思い出そうとしても手遅れです。】

第2章 生命倫理

① LGBTの人たちの救済

聖書には「神が母の胎内でヒトを組み立てられた」（詩篇139篇13節）とあります。生命誕生の過程は現代医学でも全てを解明する事はできず、ヒトが受精卵から成長していく様は、まさに神業といえる現象です。神によって造られ、この世に誕生した人の命は、すべて尊いものです。

詩篇139篇13節～16節（リビングバイブルより）

【神様は、精巧に私の体の各器官を造り、母の胎内で組み立ててくださいました。こんなにも複雑かつ緻密に仕上げてくださいましたことを感謝します。その腕前は天下一品だと、よくわかっております。秘密の工房で私を組み立てる時、神様は立ち合われました。生まれる前から、まだ呼吸を始める前から、神様の目は私に注がれており、その生涯にわたるご計画も、練り上げられていたのです。】

神は母の胎内でその人を形づくる時に、まずは、男女の性を決め、その人が歩むべき祝福の道（ブループリント）を定められます。すなわち生まれ持った性は、神からの最初の約束であり、その人が、人生をどのように歩むべきかを定めたメッセージなのです。

しかし、その最初に神から与えられた祝福の定めを、自ら放棄し、ブループリントの祝福とは真逆の人生を歩もうとする人たちがいます。それが性的少数者と呼ばれる LGBT

（レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー）です。LGBTの人たちは、「神が性別を間違えたのだ」と主張しますが、神は性別を間違えません。一人ひとりを母の胎内で大切に組み立て、その人生に至福の計画を授けたというみことばに間違いはないのです。

レズビアン・ゲイは性指向（どんな性別の他者が好きか）が同性に向かう同性愛者、バイセクシュアルは性指向が異性、同性の両方に向かう両性愛者です。

トランスジェンダーとは、本来神から与えられた性を自分の心が否定し、心と体が一致しない状態に苦しむ障害（性同一性障害）を言います。男性であるのに自分が女性だと思い込んでしまう場合（MTF）と、女性であるのに自分が男性であると思い込んでしまう場合（FTM）があります。いずれの場合でもその心（性自認）を医学的に治す事は困難であるとされ、カウンセリングの上で、心が思い込まされている性に、体を転換する治療を行っていくケースが多くなります。本来の体の性を転換するためにホルモン剤の投与や、性転換手術を行う事となります。

しかしながら、例えばFTMに男性ホルモンを投与しても、ひげが濃くなる、声が低くなる、多少男性っぽい体格となるくらいの効果しかありません。ホルモン投与をやめれば元の体に戻るため、効果を維持するためには、ホルモン剤注射を打ち続けなくてはなりません。そして、このような治療を続ける事によって、高脂血症や血栓症になるリスクが高くなるなどの副作用の危険にさらされ続けます。一般的

に性ホルモン剤を投与し続けた人の寿命は、短くなる事が知られています。

性転換手術をしたとしても、生殖機能的に子孫を残せる体になる訳ではありません。どれだけ医学の手を借りても、神が約束した本来の性を、完全に変える事はできないのです。心と体の不一致は決して解消される事はなく、彼らは苦闘葛藤を抱えたまま、一生生きていかななくてはなりません。

聖書には LGBT について次のように書かれています。

ローマ人への手紙1章24節～27節 (リビングバイブルより)
【そこで神様は、彼らがあらゆる性的な罪に深入りするに任せました。そうです。彼らは互いの肉体で、汚らわしい罪深い行為にふけたのです。彼らは、神様についての真理を知っていながら、信じようとせず、わざわざ、偽りを信じる道を選びました。そして、神様に造られた物には祈りながら、それらをお造りになった神様には従いませんでした。この創造主である神様こそ、永遠にほめたたえられる方です。アーメン。そんなわけで、神様は彼らを放任し、したいほうだいの事をさせました。そのため、女でさえ、定められた自然の計画に逆らい、同性愛にふけるようになり、男も、女との正常な性的関係を捨てて、同性間で汚れた情欲を燃やし、恥ずべきことを行ないました。その結果、当然の報いを受けているのです。】

LGBT である彼らは皆「心」のあり方に悩み、葛藤してきました。生きていく中で、様々な対人関係の悩みを持ち、疎外感

を感じ、自己肯定できずにもがいているのが現状です。

これに対して、世界中が容認の動きを見せていますが、本当にそれで良いのでしょうか。

では、容認さえしたら、彼らは本当に癒され、悩みから解放されて幸せになれるのでしょうか。聖書の真理を知ったクリスチャン医師として、それは人の人生に対してあまりにも他人事で、無責任な事であると思い、この場を借りて発言させて頂いていますが…。

そもそも、彼らが主張する心の性、その「心」について、聖書は、【心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。】(エレミヤ17:9)と教えています。「心」が悪に染まっているなど、考えてみた事もないかもしれませんが、実際に「心」ほど移ろいやすく不確かなものはありません。聖書には悪霊の存在が書かれており、この悪霊が「心」に自由に出入りして人間を翻弄するのだという事が書かれてあります。LGBT の人たちの心は、悪霊によって偽りの思いに支配されている状態にあると言えます。最近では、性転換手術という言葉さえ、性適合手術と変えて表現するように、当事者たちは主張していますが、悪霊が支配する「心」に先導されて、体まで改造し、命をけずりながら生きていく事は恐ろしい事です。性同一性障害の人は、神が性を定めて造られた体に対して、悪霊から、これは本当の自分ではないと思込まされ、同性愛者も、同性を好きだと思込まされている、というのが聖書的見解です。

“LGBTの原因が、悪霊の働きにある！”ここに、LGBTの人たちを救済する重大なカギがあります。

人間を母の胎内で組み立てた神だけが、現代の医学で治せないLGBTで苦しむ人たちを癒す事ができるのです。

イエス・キリストは、別名『ドクター・ジーザス』と呼ばれ、完全な癒しをくださいます。神の癒しは、心身の病気にとどまらず、人間が生きていく上で直面する様々な困難や問題にまで及びます。

医師は、病気を外側(現れた症状に対して)から治しますが、イエス・キリストが治してくださるのは、人間の内側からです。その人間の病気や問題を来たらした根本的な原因を突き止めて、そこから治療していきます。根本的な原因とは、どこにあると思いますか？聖書は、それが「霊」にあると教えています。

神は人間を創造された時、神を認め、神と交わりを持つ事ができるように、一番内側にあたる部分に「霊」というものを与えました。これは、すでに私たち人間の知識(認識)の範疇はんちゆうにある幽霊や悪霊、守護霊というものではなく、神という存在を知るために与えられた「本当の自分・自分の本質」です。

聖書には、人間は、霊・魂・体で造られていると書かれています。しかし、最初の人間・アダムとエバが、神を裏切り、交わりを損ない、神との関係を絶ってしまった時、その霊は死に(活動をまったく停止させてしまい)、本来の働きを失ってしまいました。それ以来、人間は、魂と体だけで生き

ていく不完全な状態になったのです。魂というものは、人間の精神活動を営む部分であり、知性・感情・意志から成り立っています。「心」も、この魂の中に属している器官です。

悪霊は、この魂に働きかけ、人間の喜怒哀楽を自由に操ります。LGBTの人たちの場合、悪霊が、その人の魂を支配し、縛っている事で、性自認や性指向の倒錯がもたらされている状態にあるのです。

【人は自分のまいたものを刈り取ることになる。】(ガラテヤ6：7b)と聖書に書かれています。良いものをまけば、良いものを刈り取ることができるし、悪いものをまけば、悪いものを刈り取り、それぞれが、自分の身となっていきます。聖書は、人間は、悪霊にだまされて、自分の「心」に悪いものをまき続けた結果を刈り取りながら生きているのだと、同時にそれは、神の目から見たら罪なのだを教えています。

『ドクター・ジーザス』の治療は、まず死んでいた霊を蘇らせ、「本当の自分・自分の本質」を取り戻し、神との交わりを回復させる事から始まります。霊が蘇ると、本来その人間の霊に神が与えてくださっていた至福の計画が動き出します。

次に、聖霊を受けると、聖霊が人間の霊とぴったりくっついて助け、導いてくださいます。そして、聖霊の力によって、今まで自分を支配し、数々の問題を引き起こしてきた原因である悪霊と戦い、追い出す事ができるようになります。

健全な霊が、心に働きかけ、知性に働きかけます。そして、

その魂の状態は、体へとあらわれます。

これまで自分を操り翻弄してきた悪霊を追い出して、本当の自分である霊を取り戻したら、良いものをまいて、良いものだけを刈り取る事ができるようになります。このように、神の癒しは、霊→魂→体の順番で行われていきます。

人間は、イエス・キリストを受け入れ、救われる事によって、初めて霊・魂・体から成る本来の完全な姿を取り戻し、母の胎内で組み立てられた時に定められた祝福の道（神が自分に与えてくださっていた至福の計画）を歩む事ができるのです。

聖書は、何らかの問題を抱えている本人ではなく、その人を捕えている悪霊に目を向ける事、悪霊と戦って追い出せる権威がある事を教えています。LGBTの人たちはこれまで悪霊にだまされてきたのです。自分を苦悩させ、自身の性に違和感を生じさせてきた悪霊が離れたら、神に与えられた性別を生きる「本当の自分・自分の本質」を取り戻す事ができるのです。目には見えない悪霊がいるという事を、皆が知ると、決して偏見や差別には至りません。聖書には、誰をも罪に定めない神の愛と、すべての人に対する希望があるのです。

エペソ人への手紙6章12節～18節

【わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。それだから、悪しき日にあたって、

よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい。すなわち、立って真理の帯を腰にしめ、正義の胸当てを胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。また、救のかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち、神の言を取りなさい。絶えず祈と願いをし、どんな時でも御霊によって祈り、そのために目をさましてうむことがなく、すべての聖徒のために祈りつづけなさい。】

ヤコブへの手紙4章7節

【そういうわけだから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ちむかいなさい。そうすれば、彼はあなたがたから逃げ去るであろう。】

マルコによる福音書1章34節

【イエスは、さまざまの病をわずらっている多くの人々をいやし、また多くの悪霊を追い出された。また、悪霊どもに、物言うことをお許しにならなかった。彼らがイエスを知っていたからである。】

テサロニケ人への第一の手紙5章23節

【どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全くきよめて下さるように。また、あなたがたの霊と心とからだを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのない者にして下さるように。】

② LGBT 容認の先にある家族のねじれと生殖補助技術

近年、LGBT の人たちが自己の権利を主張するようになってきました。メディアも大きく取り上げるようになってきましたが、多くはLGBTの問題を、差別・人権問題に焦点を合わせ、個人の性的指向やマイノリティーの権利を認める事、それは、人の多様性を認める事であるという観点でのみ論じられています。

しかし、LGBT問題を単に人権問題と捉え、容認していくことは危険です。なぜなら、彼らは結婚し、子を持ち、家族を作りたいと主張し始めたからです。同性同士で子を作れないのは、神が定めた自然の摂理です。以前は、LGBTの人たちが子孫を残す事はできず、その人一代で人生を終えていましたが、現代の医療の進歩は、LGBTの人たちに新たな欲望を生み出させてしまいました。現在、同性婚が認められている海外に追随するように、日本においても、同性婚を法制化すべきであるという要求が出始めています。彼らの主張を容認する事は、次世代に悪影響を及ぼす重大な事態を招いてしまいます。

現代では、不妊治療で行われる人工授精（精子を子宮に注入する方法）や、体外受精（卵子を体外に取り出して受精させ、子宮に移植する方法）などの「生殖補助技術」を用いて、第三者より「精子・卵子提供」を受ける事により、同性愛者でも子を持つ事が可能になりました。そこに生まれてくる子供たちは、父親が二人、あるいは母親が二人という自然ではあり得ない家庭環境の中で育てられる事

になります。

例えば、レズビアンカップルが子を求める場合、他者から提供された精子を、どちらかの子宮に人工授精すれば妊娠する事ができます。日本では、非配偶者間人工授精（AID）は、戸籍上の夫婦でのみ行う取り決めになっているので、同性カップルは受ける事ができません。しかし、精子は採取が容易な事と、自己注入をする事によって妊娠する事が可能である事から、「精子バンク」と称した精子提供サイトを通して、個人で安易に人工授精をしたり、性交渉をも、提供者と行っているのです。そして、実際に妊娠出産に至っているケースもあります。提供者が既婚男性で、妻に内緒で多数の女性に精子を提供し、何十人もの子の父親になっている事例もすでにあります。まるで、インターネットで商品を買うように、精子の授受が行われているという現実が起きているのです。子の求め方が、ペットを求めるような感覚の人に、人の親としての責任感が備わっているとは思えません。生まれてくる子供の命の尊厳など全く考えていない、身勝手に恐ろしい行為です。

また、ゲイカップルが子供を得るためには、女性からの卵子提供（若い女性に海外旅行感覚で、旅先で卵子提供を斡旋する団体もある）と共に、妊娠出産してもらう「代理母」が必要になります。すなわち、生まれた子供には、遺伝上の母親と生みの母親、自分を育てているゲイカップルという4人の“親”が存在する事になります。同性婚を認めているアメリカでは、すでにこのような事例が実際に起こっています。

同性カップルが、子供をもちたいという主張を認める事は、神の秩序をねじ曲げる事になるのです。

新しい親子、新しい家族の形とって、それを新時代の多様性という言葉に置き換え、さらには人権を掲げて美化する考えもあります。しかし、その考え方は、生まれてくる子供たちの立場（人権）には立っていません。

精子・卵子提供によって生まれ、育てられた子供たちは、決して本人が望んでその環境を選択したものではありません。神が定めた秩序とはかけ離れた環境で、自分の遺伝上の親が誰なのかはっきりと分からないまま育てられた子供の多くは、成長するにつれ、その環境が異常である事（決して新しい形ではなく、異質な形である）という事に気付いていきます。そして、自己の存在に疑問を抱き、自分自身が誰の血を受け継いでこの世に誕生したのかという出自に悩み、知りたくなるでしょう。また、自分の遺伝的ルーツが分からない子供たちが成長し、結婚しようとする時、相手が近親者かもしれないという恐れにも直面します。もしも本当に近親婚となった場合、遺伝病の発症リスクも高まり、人類を破滅に導く事にもなるのです。

悪霊の目的は、盗み、殺し、滅ぼし、すべての人を真理から引き離し、神に対して罪を犯させて破滅の道を歩ませ、最終的に自分と同じ地獄に引きずり込む事です。LGBT問題に連なる次世代の「命」についての問題は、人間を破滅に追い込む悪霊の策略にほかなりません。今こそ人間は、救われて、本当の自分を取り戻す時です。聖霊の力によって、

私たちに仕掛けられている悪霊の策略を見破り、そのわざを滅ぼして命を守り、真っ直ぐに生命を繋げなければなりません。

ヨハネの第一の手紙3章8c

【神の子が現れたのは、悪魔のわざを滅ぼしてしまうためである。】

第3章 出自に悩む子供の救済

「今は命の尊厳と家族のあり方が軽んじられている時代である」と書きましたが、社会には、命に関わる様々な問題があふれています。その中で、一番の被害者は、命の尊厳を軽視した大人のもとに生まれ出た子供たちだと言えます。

第3者からの精子・卵子提供によって生まれた子供たちは、自分の出自に悩み、社会からの疎外感を感じ続けます。

望まない妊娠の上に生まれた子供の中には、生み捨てられたり、命を奪われたりする子もいます。命が救われても、乳児院や赤ちゃんポストに預けられたりする子は、孤独や寂しさを感じ続けます。また、たとえ血縁上の両親のもとにいても、親としての自覚も責任感も備えていない家庭で育つ子供は、心が満たされないまま成長していきます。

彼らは、自分は一体どんな存在としてこの世に生まれて

きたのかを模索し、受け入れがたい不条理に悩み、時に怒りさえ感じ、魂が傷ついています。魂が傷つけられていくと、自分自身が尊い存在だと思えなくなります。自己肯定感が無く育った子は、他者に対しても関心を持って接する事ができず、社会からも孤立していきます。

多くの子供たちは、それが自分の運命だと思い、時に自分の運命を呪いつつも置かれている境遇を受け入れ、多くの事をあきらめて生きていきます。

聖書は、その運命は変えられると教えています。

もともと人間は、真の神から離れて偽の神々に仕えていたが故に、3代～4代に渡って血の中にある（家系にある）呪い、崇りを受けていると聖書に書かれています。その呪い、崇りの中で生きる事を「運命」といいます。

しかし、真の神を信じる事で、今まで犯してきた罪は赦され、3代～4代に及ぶ先祖の崇りや血すじにある問題も、御子イエス・キリストが十字架上で流された血によって、断ち切る事ができます。

救われ、霊・魂・体から成る本当の自分を取り戻した人間は、もはや血すじに影響される事のない、“個”としての自分となって新しく生き直す事ができるのです。どのような環境、生い立ちの中で生きてきたのか、親が誰なのかが問題ではなく、ただ一人の尊い“神の子”となって、何にも支配されない新しい人生、すなわち『天命』を生きる事ができるのだと教えています。

出エジプト記20章3節～6節

【あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあるものの、どんな形をも造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし、わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至るであろう。】

ヨハネの第一の手紙4章8b節～10節

【神は愛である。神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。】

ヨハネによる福音書1章12節～13節

【しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生れたのである。】

～次世代を担う子供たちへ～

もしあなたが、自分の出自で悩んだり、自分の力ではどうする事もできない問題で苦闘葛藤しながら、これが運命だと思っているのなら、今すぐに「救われて」ください。

聖書は、悪霊の存在を知らせており、それが人間を騙し狂わせて、様々な病気や不幸といった問題をもたらすのだと教えています。「救われる」という事は、「悪霊が来たらせているどうにもならない現状、光のない海底から、太陽が輝く神の手の中にヒョイっとすくい上げられてください！」という意味です。神は、そのようなすべての子供たちが救われ、神の子となって、ご自分が一人ひとりに与えた至福の天命を生き始める事を望んでおられます。

<救いの告白>

声に出して読んでください。

『愛する天のお父様、イエス様。私がこれまで犯してきたすべての罪をお許しください。イエス様が、私の罪の為に十字架にかかってくださり、3日目に神が死人の中からイエス様をよみがえらせたことを信じます。イエス様、どうぞ私の中に入ってください。そして、私のこれからの人生を導いてください。イエス様の御名前によって感謝して祈ります。アーメン』

続けて、聖霊と異言^{いげん}をいただきます。

『愛する天のお父様、イエス様。私に火と聖霊によってバプテスマ（洗礼）を授けてください。私の全身を聖霊で満たしてください。たった今、聖霊をいただけたと信じます。そして異言もください。いただいたと信じ、舌を動かします。（ララララ…と声を出して舌を動かしてください）イエス様ありがとうございます。あなたがおっしゃる通り、しるしと奇跡を行い、異言を語ります。すべての栄光はイエス様に帰して、感謝して祈ります。アーメン』

おめでとうございます！

神の子となったあなたは、神の目から見て尊い存在です。あなたは、この世界に一人だけであり、前世も後世もありません。誰かの生まれ変わりでもありません。あなたの人生に至福の計画を用意し、その道を歩かせるために、神が、あなたをたった一人の尊い作品としてこの世に送り出しました。

イザヤ書43章1節～7節

【ヤコブよ、あなたを創造された主はこう言われる。イスラエルよ、あなたを造られた主はいまこう言われる、「恐れるな、わたしはあなたをあがなった。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ。あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共にいる。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上にあふれることがない。あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことがない。わたしはあなたの神、主である、イスラエルの聖者、あな

たの救主である。(中略)すべてわが名をもってとなえられる者をこさせよ。わたしは彼らをわが栄光のために創造し、これを造り、これを仕立てた。】

救われたあなたに、覚えておいてほしい三つの大切な事があります。

一つ目。あなたは尊い存在なのだという事をいつも覚えていてください。

あなたはこれまで、自分の事を、価値のない人間だと思った事がありますか？人と比べて自分はダメなやつと思って劣等感を感じたり、自分の存在を否定したり、生きる事に虚しさや不安を感じる事はありませんでしたか？

それは、神の子となったあなたにとって、全く無縁の、過ぎ去った古い自分です。本当のあなたではありませんでした。それは一体どういうことか、お話ししましょう。

悪霊は、人間の心に働きかけてくると言いましたが、救われた後も、相変わらず悪霊はあなたの心に忍び込んできて「お前には価値がない、お前はダメなやつだ」とささやいてくるでしょう。救われる前のあなたなら、その声が自分の心に染みついて、自分はそんな人間だと思ったかもしれません。しかし、神の子となったあなたは、その声を受け付ける必要などありません。今のあなたには、神の言葉であるみことばが与えられています。恐れや不安が襲ってきて自分の心が曇る時、みことばに立ち返ってください。そこには「私の目にあなたは高価で尊い」と書かれているはずです。

誰かに何かを言われて傷ついた時や、自分を見失いそうになった時、聖書を開くと、神は何度でも「あなたは尊い存在だ」「あなたを愛している」と言い続けてくださいます。それが真実です。

悪霊が入り出す「心」にだまされないように注意しなければなりません。そのために神の言であるみことばを蓄えるのです。そのみことばによって、「心」を悪霊から守るのです。自分の心の思い、感情をみことばと照らし合わせてみると、自分の心に悪霊が忍び込んできているかどうかを知る事ができます。

聖書は、神の子の性質を「御霊の実」という言い方で9つ示しています。この「御霊の実」以外の思いがあなたの心にあるならば、それは悪霊が入れてきた思いです。イエス・キリストの権威で悪霊と戦い、速やかに追い出しましょう。

ガラテヤ人への手紙5章19節～24節

【肉の働きは明白である。すなわち、不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、まじない、敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、宴楽、および、そのたぐいである。わたしは以前も言ったように、今も前もって言うておく。このようなことを行う者は、神の国をつぐことがない。しかし、御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない。キリスト・イエスに属する者は、自分の肉を、その情と欲と共に十字架につけてしまったのである。】

詩篇 119 篇 9 節～11 節

【若い人はどうしておのが道を清く保つことができるでしょうか。み言葉にしたがって、それを守るよりほかにありません。わたしは心をつくしてあなたを尋ね求めます。わたしをあなたの戒めから迷い出させないでください。わたしはあなたにむかって罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました。】

二つ目。あなたの両親を赦す事。

聖書が教えている事は、「血肉の戦いではない」という事です。それは、目の前にいる人間が悪いのではなく、その人間を使って問題を引き起こす悪霊という存在に目を向けなさいという事、そして、イエス・キリストの権威でその悪霊を追い出したら、必ず問題は解決していくのだという事です。

イエス・キリストによらなければ、人間は誰一人として例外はなく、その心に悪霊が出入りし、もてあそばれる存在なのです。

救われる前までのあなたも、そのように生きてきたはずで、自分自身を卑下し、責めたり、誰かをうらやんだり、憎んだり、うそをついたり…何よりも、神を認めずに悪霊に心を先導され、様々な問題や不都合に振り回されてきたはずで、自分の親、周りの人も同じであったと気づかなければなりません。「血肉の戦いではない」というみことばの意味を知れば、様々な問題は、あなたの親が悪いのではなく、彼らも悪霊の被害者だったという事が

分かるはずです。

「罪（悪霊）を憎んで人を憎まず」と言う言葉がありますが、その通りです。そして、神の子は、さらに聖霊の力によって人を「^{ゆる}赦す」事ができます。

イエス・キリストの十字架は、無条件の愛と赦しの象徴です。イエス様は、あなたを赦し、愛して、神の子としてくださいました。あなたがこれまで犯してきた罪は、イエス様の十字架によって赦されたのです。ならば、あなたも、自分の両親や、周りの人を赦さなければなりません。相手を赦すことなしに、あなたの心が完全に解放される事はありません。人間にとって一番苦しい事は、誰かを赦せずにいる事ではないでしょうか。その思いが、あなたにこびりつき、あなたを支配する事のないように、憎しみ・裁きの悪霊と戦い、心から追い出してください。そして尊い存在である神の子なのだという誇りを持って、あなたに与えられた至福の計画を歩んで行ってください。

コリント人への第二の手紙 2 章 10 節～11 節

【もしあなたがたが、何かのことについて人をゆるすなら、わたしもまたゆるそう。そして、もしわたしが何かのことでゆるしたとすれば、それは、あなたがたのためにキリストのみまえてゆるしたのである。そうするのは、サタンに欺かれることのないためである。わたしたちは、彼の策略を知らないわけではない。】

マタイによる福音書6章14節～15節

【もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。もし人をゆるさないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう。】

エペソ人への手紙4章31節～32節

【すべての無慈悲、憤り、怒り、騒ぎ、そしり、また、いっさいの悪意を捨て去りなさい。互に情深く、あわれみ深い者となり、神がキリストにあってあなたがたをゆるして下さったように、あなたがたも互にゆるし合いなさい。】

三つ目。交わりに気をつける事。

聖書は、「交わりに気をつけなさい」という事も教えています。あなたがどのような環境に身を置き、何を見聞きし、どのような人と何を会話するかといった、交わりについても注意しなくてはなりません。その交わりによって、自分が感化されていく（＝心に悪霊が忍び込む）事を忘れてはなりません。悪霊は、人間を感化させていくために巧みな方法をとっています。

昨今、問題になっている LGBT を例に挙げるならば、テレビ番組でゲイを面白おかしく取り扱ったり、コメンテーターとしてもっともらしい意見を言わせれば、人々は抵抗感をそれほど感じずに受け入れていきます。子供の世界では、アニメや番組のキャラクターをトランスジェンダー（性

同一性障害者）にする事によって、子供たちに違和感を感じさせず、意識に刷り込んでいくようなものが作られています。メディアはこぞって、LGBT 容認についての記事を載せ、当事者たちの苦しみや生き辛さを紹介します。人々は、「認めてあげなくてはかわいそう」と情が動き、いやおうなしに容認の動きは加速します。そのような LGBT 容認の雰囲気の中で、悪霊が心に忍び込み、お前も LGBT だと囁いたら「もしかしたら同性が好きかも。私も LGBT かも…」などと思いはじめ、やがてその声が心に染みつき、体まで支配されてしまうのです。現在日本における LGBT 当事者の年代別の割合が、10～30代が全体の約80%を占めるというデータ（2015年NHK LGBT 当事者アンケート結果）がありますが、それはこのような「交わり」によるものが大いに関係しているものと思われます。

他にも悪霊は、様々な媒体を使ってあなたの心に忍び込もうと狙っています。暴力的なゲームや、読み物、テレビ番組、また人との関わりもそうです。人の悪口や不平不満などと言うような交わりは好ましくありません。神はあなたを愛しているのと同じように、相手の事も愛しておられるのですから。あなたの内には、すでに聖いお方であるイエス・キリストがいらっしゃいますから、あなたを惑わせるような事柄について、「これは神から来ていないな、なんだか気持ち悪いな」と分かるようになります。

コリント人への第一の手紙15章33節b

【悪い交わりは、良いならわしをそこなう。】

このような事柄に気をつけ、自分を大切に生きてください。

神の子となり、新しい人生のスタートを切ったあなたは、もうこの世の誰からも判断される必要も、評価される必要もありません。また、自分で自分の価値を決めつける必要もありません。ただ、あなたを愛し、あなたを母の胎内で組み立ててこの世に誕生させてくださった神がおられる事と、その方が、この世で後にも先にもたった一人のあなたを愛し、大切に思っているのだという事実だけに、心を留めていてください。

どうぞ、神の子となった事を心から喜び、あなたに天命を授けてくださった父である神を喜ばせる人生を歩んでください。あなたに与えられた人生の至福の計画が豊かに成就する事を祈っています。

おわりに～ローマ人への手紙より～

ローマ人への手紙1章24節～27節（リビングバイブルより）
【そこで神様は、彼らがあらゆる“性的な罪”に深入りするに任せました。そうです。彼らは互いの肉体で、汚らわしい罪深い行為にふけたのです。彼らは、神様についての真理を知っていながら、信じようとせず、わざわざ、偽りを信じる道を選びました。そして、神様に造られた物には祈りながら、それらをお造りになった神様には従いませんでした。この創造主である神様こそ、永遠にほめたたえられる方です。アーメン。そんなわけで、神様は彼らを放任し、したいほうだいの事をさせました。そのため、女でさえ、定められた自然の計画に逆らい、同性愛にふけるようになり、男も、女との正常な性的関係を捨てて、同性間で汚れた情欲を燃やし、恥ずべきことを行ないました。その結果、当然の報いを受けているのです。】

聖書にはLGBTについてこのように書かれていますが、“性的な罪”という言葉に着目すると、“性的な罪＝命に関わる罪”である事に気が付きます。

神は、命に関わる罪に深入りするに任せた＝人間に性的な罪に深入りさせる事を悪霊に許したという事です。それは神の怒りから来ています。なぜでしょうか。前後のみことばを読み解いていくとその理由が分かります。

ローマ人への手紙1章18節～21節 (リビングバイブルより)
【しかし、真理を押しつける、罪深い邪悪なすべての人に、神様の怒りは天から下ります。なぜなら、彼らは神様についての真理を、本能的に知っているからです。神様が、この知識を、彼らの心にお与えになったのです。世界が創造されてからこのかた、人々は、天地や、神様がお造りになったすべてのものを見て、神様の存在と、その偉大な永遠の力をはっきり知っていました。ですから、彼らには弁解の余地がないのです。そうです。彼らは確かに神様を知っているのです。けれども、そのことを認めず、神様を礼拝せず、毎日神様に守られていることを感謝しようとしません。やがて彼らは、神様がどのようなお方か、また自分たちに何を求めておられるかについて、ばかげたことを考えるようになりました。その結果、彼らの愚かな心はくもり、何が何だか、わからなくなりました。「神様なんか信じなくてもいい、自分は賢いのだ」と主張しながら、その実、全くの愚か者になってしまいました。そして、栄光に輝き、永遠に生きておられる神様を礼拝する代わりに、木や石で、鳥や獣や蛇、あるいは、くだらない人間の偶像を作り、それを神としたのです。】

ローマ人への手紙1章28節～32節 (リビングバイブルより)
【このように、彼らが神様を捨て、認めようとしなかったので、神様は彼らに考え出せるかぎりの悪事をさせておられました。それで、彼らの生活は、あらゆる悪と罪に染まり、むさぼりや憎しみ、ねたみ、殺意、争い、偽り、苦々しい

思い、陰口に満ちたものとなりました。彼らは人の悪口を言い、神様を憎み、横柄で、高慢で、大ぼらを吹き、いつも何か新しい悪事を考え出し、親に反抗し続けました。わざと物事を曲解し、平気で約束を破り、情け知らずの不親切な者となりました。そのような罪を犯せば神様から死の刑罰を受けなければならないことを、よくよく承知の上で、その道を突き進み、しかも、自分ばかりか、他の人まで引きずり込んでいます。】

聖書のこの箇所を読むと、今の時代についてはっきりと書かれていることが分かります。ここに書かれてあるのは、問題が山積している世の中を作ってきた全人類への警告です。

毎日規則正しく日が昇り、日が沈み、その中で生かされているすべてのものが、自然界の摂理という形で保たれている事は、全人類が知っている事実です。このような事が、天地創造の初めから今日に至るまで一日の休みなく営まれ、その中で生かされている以上、神という存在は明らかです。宇宙や地球の営みのうち、どれか一つが欠けても生命が存続していく事はできません。人間は、この瞬間も呼吸をし、心臓が動き、生きているという時点で、すでに神を見聞きし、体験していると言えます。しかし、人間はその存在を認めず、信じず、感謝しようともせずに生きてきました。

そのような人間に神の怒りは下ったのです。その結果、人間は悪霊に心を支配され、様々な汚れた思いを心の内に持ち、神の愛とは真反対の生き方をするようになりました。

聖書には、「神を愛し、隣人を愛せよ」と人間が生きる土台となる戒めが書かれています。この戒めが、人間が生きていく中で一番大切な戒めです。しかし、神を認めない人間は、それに従いませんでした。その結果が、人間同士が互いに憎みあい、それぞれが自分の利益だけを求める事によって生まれた分裂や分派、戦争です。世界のいたるところで紛争や戦争、あらゆる民族間のいがみ合いが続いています。日本も「強い国＝武装」づくりを進めています。要するにどの国も、相手を威嚇、屈服させる事によって自国を守り、国を導いていくという「隣人を愛する」事とは真反対の道を突き進んでいるのが現状です。そして、とうとう人間はその欲望の為に核兵器を作り出しました。今や、それはたった一発で地球上の生命を全て破壊し尽すほどの脅威となりました。

神の存在を無視した人間たちに起こってきた事は、家庭の中においても深刻な問題をもたらしました。神の秩序を無視し、子を生み育てる自覚や責任感が欠如したまま子供の親になった結果、様々な形の虐待が恒常的に存在する“機能不全家庭”が増えました。また、家庭内不和や離婚率が増加し、それに伴って貧困率が高まりました（貧困家庭の多くが母子家庭である）。自分にとって一番の隣人である家族を愛する事ができず、分裂している状態です。そのような人たちが離婚再婚を繰り返す事によって、その度に振り回され、傷つく子供たちがいます。いじめ、貧困、教育格差、家庭に居場所がないために走る非行や犯罪など、命に関わる深刻な問題は、次々と起こっています。

そして、このように神に逆らって突き進んだ果てに、遂に現れてきたのが、“性的な罪”といわれる LGBT です。戦争も命を奪い人類を破滅に導きますが、人間が遺伝子の歪みにより弱っていく事によっても、人類は確実に破滅の道を進む事でしょう。

実際に、LGBT の人たちの話を聞くと、育ってきた家庭環境に問題があったという人が何人もいました。

あるトランスジェンダー（FTM）の人の場合は、幼少の時に両親が離婚して、その後、母親が他の男性と再婚し、一つ屋根の下で共に暮らすようになりました。彼女は無意識に、男っぽい振る舞いをするようになりました。それは父親ではないその男性から、女性として見られたくないための彼女なりの防衛策でした。そんな振る舞いを長年続けているうちに、だんだんと自分は実は男性なのではないかと思ひ込むようになったそうです。

また、ある方（MTF）は、父親に父性＝男らしさが欠落しており、“機能不全の家庭”で育ったそうです。父親からの父性を受ける事なく、母親や姉妹たちの中で育ち、女性らしさに感化されていく事によって、自分も女性なのではないかと思うようになったとの事でした。

幼少期から数年に渡って実の父親から性的虐待を受け、男性に対して嫌悪感と恐怖心を持つようになった結果、同性愛に走ったというレズビアンの人もありました。

LGBT の人たちの家庭環境を見るにつけ、彼らの人格が、LGBT に至る悪霊の支配下で、形成されているのだという事が分かります。

しかし、イエス・キリストに救われる事によって、神から与えられた本来の自分の性で生きる事ができるのです。救われた瞬間から生きる道を天命（神の命じる生き方）と言いますが、これこそが、神が母の胎内で組み立てた時に一人ひとりに与えた人生の至福の計画です。

人間は、自分を神よりも賢い者として多くの計略を考え出しました。それによって発展を遂げ、これからも前進していくのだと思っているでしょう。けれど、神の目から見て、それは薄氷を踏むような生き方をしているにすぎません。

示された聖書の言葉から、今の時代に対して、神がどれほど重大な警告を与えておられるのかを知ることができます。それを悟る時、ますます人間は、神の存在を無視しては正しく生きられない、生き延びる事はできないのだと確信するのです。

様々な問題を解決しようとする時、人間に必要な事はとてもシンプルです。

まず、問題の原因が「神を認めず、神に対して反逆した状態」によって引き起こされたのだという事を認める事です。そして、そのような生き方を悔い改めて神に立ち返る事、すなわち、「救われる」事です。

神は、無限の愛を惜しみなく人間に注いでくださる方であり、無から有を呼び出し、不可能を可能にする力のある方です。人間が、神に立ち帰るならば、神は喜んで受け入れ、一人ひとりの問題を解決してくださいます。それだけでは

なく、自分が運命の中で犯してきた罪や不幸も、時にかなって美しくすべてを益に変えてくださいます。

神を認め、愛し、信頼して従うならば、私たちの希望は失望に終わることがない事が約束されているのです。

伝道の書 1 2 章 1 3 節～1 4 節（リビングバイブルより）

【これが私の最終的な結論です。神様を敬い、その命令に従いなさい。これこそ人間の本分だからです。神様は私たちのすることは何でも、人目につかないものでも、善でも悪でも、みなさばかれるのです。】

「ぶどうの木」発行
2017.6.19

「ぶどうの木」発行
<http://budounoki92.com/>